

平成十一年九月三十日 体育祭記念講演

## 「スポーツと人生」

ただいまご紹介いただいた長沼でございます。

本日は時間の許す限り、サッカーあるいはスポーツのお話をさせていただき、みなさんに「この人はじつは講演というよりはスポーツの宣伝に来たのだな」と思われてもかまわないという気持ちで参りました。

私は今、サッカーだけではなく日本体育協会のほうにも関わっております。特にスポーツ少年団というのが全国にあり、現在百万人ぐらゐメンバーがおりますが、今年その本部長の仕事をお受けすることにしました。それ以外に、知的障害者の諸君が頑張っているハンディキャップ・サッカー連盟というのもございます。あちこちのスポーツ団体に関わっております。そのなかでも、サッカーの代表チームの監督を割に長くやらせていただきました。「スポーツとは何だ」とか、「サッカーって何だろう」「世界のレベルと日本の違いとは何か」というようなことを嫌でも考えざるを得ない状況の中で仕事をしております。

二〇〇二年FIFAワールドカップ 日本組織委員会 副会長 長沼健先生

監督をしていた当時、選手を含め私も一番大きな影響を受けたのは、一九六〇年にドイツから来日したデットマール・クラマーという非常に優秀なコーチです。この人が来てくれて日本のサッカーは本当に変わりました。彼はコーチですから、技術がどうの、体力がどうの、という話を朝から晩まで言われると思っておりました。しかしそうではなくて、彼は人間づくりが大切なのだ、ということを非常に強く主張しました。

彼は、いろいろな良い言葉を知っていますね。当時、それを聞いた選手はしびれました。例えば、「少年を大人にするのがサッカーだ」。つまり、お互いに磨きをかけて第一級のジェントルマンにするのがサッカーなのだ、なんてカッコいいことを言うわけですよ。それで、いい意味で選手は洗脳されて、どんどんその気になって、当時インターナショナルなレベルに到達しました。その中でも一番目立ったのが、釜本（邦茂）選手でございました。彼がアジア

ナンバーワンになったのも、やはりクラマーさんの薫陶があつてのことだと思います。

私がこの仕事を続けて感じているのは、スポーツに必要なものは、ある意味では人生に必要なものと完全に重なっているな、ということですから。これが偽らざる実感でございます。そこで今日は三つのポイントをお話したいと思います。

まず、大切なのはモチベーションです。選手諸君もそうですが、モチベーションの低い子は伸びません。モチベーションを高いところにおいている人ほど伸びます。要するに潜在能力が刺激されて、伸びていくのです。これはもう万国共通だし、スポーツ全種目共通にいえることです。

今、日本のサッカーの中で一番高いモチベーションを持っているのは、中田のヒデ（英寿）でしょう。彼は常に現状では満足しないという

タイプの典型でございます。「もつと上があるはずだ、もつともつと上が」といつも考えております。イタリアに行っても堂々と戦っている。その裏では彼のいい意味での負けじ魂が支えているな、と思います。初めはちよつと細めで、ヨードンでぶつかつたら飛ばされるほうでした。今はイタリア野郎を腰でぶつ飛ばしてますからね。これは何となくそうだったのではなくて、彼はすごくボディ・コンストラクション、筋力トレーニングを頑張ったからです。人が見えないところでのトレーニングをすごくやっています。人間というのは急にそんなに強くなるわけがないのです。かげの努力が実つて、現在の活躍につながっています。

フランス・ワールドカップの前年の十二月に、マルセイユで、決勝トーナメントに出る国だけの抽選会がございました。三十二カ国が集まつて、当然、我々も行きました。国際サッカー連盟は、「全ヨーロッパ選抜」対「世界選抜」というチームを作って、抽選会の前座のようなエキジビジョンマッチを必ず行ないます。中田は「世界選抜」チームに入りました。周りを見たらロナウド選手をはじめ、すごいやつがズラーツといるわけですよ。それだけでも普通の日本の選手だったら、ビビりはしなくても興奮気味になりますよね。しかし彼はいたってクールでした。

九〇分フルタイム出場して、その晩、彼に「きようはどうだった？」と訊いてみたら、彼の答えは「つまらなかつたです」と一言。普通だつたら「このバカヤロウ、世界の強烈なやつと一緒にやつたら喜びがあつてしかるべきだ」と私は言ったところですが、「何がつまらなかつたんだ？」とききかえしたら、「だつて、ロナウドでしょ、バティでしょ、あいつらもつとやる選手だと思つたのに、案外そうでもなかつた」と答えてきました。私は「それは中田ね、この試合に出て勝つても自分の給料が上がつたりしない。むしろ、この試合でケガでもしたらそれぞれの所属クラブにもすごく怒られる。だから手抜きはしないけれども、目いっぱいはやつてない。それが世界選抜に選ばれたやつらの姿だし、ヨーロッパ選抜だつてみんなそうだったじゃないか。ギリギリのところはお互いに競り合わなかつただろう」と言つたら、「そうですね。そうですね」と頷いていました。

だから、常に「もつと上がある、もつともつと上がある」という気持ちを選手が持ち続けることが、上に上がっていくための一番大事な条件だなどというのは、身にしみて感じています。今、オリンピックチームの諸君はそれに近い心境であると思います。少なくともキャプテンをやっている宮本は、まさにそういう気持ちでい

ます。

先般もソウルの試合で、ちよつと不細工でしたが、とにかく日本が勝ちました。ソウルで韓国に勝つというのは、皆さんのご想像よりもはるかに大変です。いろんなプレッシャーがありますからね。とくに韓国はサッカーが国技みたいなかんじですから、そこで結果を残したことは褒めてやってもいい。けれども「勝つてよかつた」という顔を選手の誰一人もしてなかつた。特に宮本は「これは予選ではない。本番はこれからだ。今日表面化した欠点を修正して次の試合にかかりたい」。そう言つてソウルからフランスフルトへ飛びました。

今はドイツでキャンプを張っています。そして試合が迫ってきたら、カザフスタンへ行つてアウエーの第一戦をやりますが、宮本のような気持ちで取り組んでいってくれたら、いい結果が出るだろうと私は思っております。

サッカーというのは常に「ホーム・アンド・アウエー・システム」といつて、本拠地で一回試合したら、相手の本拠地で一回やるというシステムです。だから、フランス・ワールドカップの予選もカザフスタン、ウズベキスタンなどの国にも行きました。私も一緒に歩きましたけど、直行便など全然ありませんから、とんでもない時間がかかりますよ。ヨーロッパに一度行つて飛行機を乗り換えてからまた戻るので、え

らい時間かけて行きました。

もちろん地元のサッカー協会はしつかりしていますから、ホテルその他は完璧でした。しかしやはり敵地での戦いというのは絶対に有利ではない。このころは随分日本からサポーターの方が行っていただけになるましたけどね。最後のジョホールバルでやった、フランスへ行くための最後の一枚の切符をイランと争った試合は、まるでホームゲームでしたね。スタンドは八十五パーセントぐらい日本人でしたよ。イランの人が千人ぐらいしかいなくて、あとは全部日本人でした。グラウンドとスタンド、真つ青だね。選手が「これは東京と一緒に」と言っていました、あのような恵まれた条件でやれたから、何とか答えも出せたのかもしれない。

何はともあれ、監督やコーチの仕事は、選手に「自分は何のためにこの仕事をやるの」「きょうは何のためにこのグラウンドへ降りていくの」ということを完璧に理解させて、グラウンドへ降ろすことなのです。

「とにかく頑張ろう」では全然駄目です。そんなことは誰でも思っているのですから。初めから負けたいと思つてグラウンドに降りるやつなんか一人もいないですよ。みんな「何とか勝ちたい」と思いますが、そこで「きょうのお

前の仕事は、これとこれ」というのを把握させてグラウンドに降ろすというのが監督の義務です。

例えば、ディフェンスで、相手のエース担当になったら、「あの野郎に仕事をさせるな」というのがありますでしょう。相手の足が速いか、左利きであるとか、どの辺へ動かしたら一番あぶないとか、当然相手の特徴があるわけですから。今はビデオがすぐく発達していますから、見ればすぐ分かる。それを封じ込めるためにはお前には何が必要か、ということを選手に把握させるのです。例えば、相手が左利きだったら「ほとんど九〇パーセント左側から抑えて、右足で仕事をさせる。右ならば不正確で大した仕事はできやしない」と。そのかわり左に持つていかせたら危ない。世界にはセンチメーターの正確さでサッカーできるようなやつがいっぱいゴロゴロいますからね。

それぞれの選手に策を授けて、グラウンドに降ろす。最終的に各人がその策を実行できたらうちのチームは勝つ、という確信を持たしてグラウンドへ降ろさないと、勝てない。だから、モチベーションというのは本当に一番大事な、と思います。

二番目が、これは勉強とか会社の仕事でもみんな一緒ですが、集中してやることです。コン

セントレーションです。これが一番大事です。

これは当時のクラマーコーチから一番お説教をくらったポイントでした。

「日本の選手は、足は速いし、小回りはきくし、真面目だし、一生懸命やる。それは認める。しかし集中力つてやつは全然駄目だ。コンセントレーションがほとんどゼロだ」と言われました。あれはみんなショックだね。「ゼロはないだろ、五点や十点ぐらいくれたっていいじゃないか」と選手は思いました。それで「集中力とは一体何なのか」ということになりました。クラマーさんはこう答えました。

「ほとんどゼロと私は言った。正確に言ったつもりだ。サッカーというスポーツをよく考えてみる。試合中、ボールに触っている時間が何分あると思つている。レベルが高いサッカーであるほど、一人ひとりがボールにコンタクトする時間は短くなっていく。トップクラスのプロだったら、九〇分のうち三分だ。諸君はまだアマチュアだから、五分程度だと思つよ。残り八十分はボールに直接関与していないポジションにいる時間だ。そこまでは分かるな。諸君が集中しているのはそのボールに関与している時間。これは認める。ボールに関与しながらボケツとしているやつはほとんど病気だ。病院に行つたほうがいい。五分間の集中、それは認める。でも残り八十五分が不合格だと申し上げて

いる。ほとんどゼロといった私の言い方は極めて正確だと思つてほしい。

それはいろんなケースがある。火元から五メートルの人、ボールのところから三十メートルの人、五十メートルの人。ゴールキーパーは、味方が攻めている真つ最中で敵陣の前にボールがあるときは百メートルも離れている。何メートル離れていようが、そこでやらなければいけない仕事がある。それを全員がやれているチームが世界ナンバーワンだと思う。それがやれない率がどんどん高くなるにつれて、そのチーム、その選手はグレードが下がっていく。最終的に情けないチームになってしまう。アマチュアというのはボールがあるときだけ必死でやつて、ないときは遊んでいる。こうなつたらチームは終わりだ。

そして、こうも言われましたよ。

「日本のゴールキーパーに忠告がある。仲間が攻めてくれている真つ最中、君にやつていただきたい仕事がある。それは仲間に対するアドバースであり、サジェスチョンであり、指示であり、命令だ。左側を押し上げろ、右は下がつてろ、八番をチェックしておけ、ちゃんとポジジョンを取れ。その場その場でいっばいある。それを危なげなくやるのが優秀なキーパーだ。だからゴールキーパーは、オーケストラのコンダクターだと思え。日本のゴールキーパーにはま

だそれができていない。今日の昼間の試合で日本のゴールキーパーがでかい声を出して喚いていた。私はうれしかった。彼も指示を出すようになったじゃないか、と思つた。ただ、残念ながら私は日本語がわからないから横にいる岡野さんに聞いた」。――余談ですが、この岡野さんとは、日本サッカー協会の会長をやつてくれている岡野(俊一郎) 君です。クラマーさんが来たとき、彼はヘッドコーチでした。私と一緒にやつて、ヘッドコーチ兼マネージャー兼通訳の全部をやつてくれました。クラマーさんはドイツ人ですから、当然、最初は全部ドイツ語でやりましたから、選手はだれもわからない。それで彼が全部通訳してくれました。

「岡野さんが隣にいたので、ゴールキーパーは何て声をかけたのですか、と聞いた。多分、指示だろうと、私は思っていた。しかし岡野さんの返事を聞いて、私は絶望の底にたたきつけられた。ゴールキーパーは「頑張ろう」と言っていたという。しかし「頑張ろう」というのはスタンドに座っている応援団の仕事である。現場にいる人間はみんな頑張ろうと思つてほしい。それができるようにやつて、やつと一人前への入り口だ、もちろん完成ではない。

お願いだから、試合中、手があいているやつは仲間に対して指示の声を出せ。ボールのそば

にいるやつは、そんなことをやっている余裕はない。しかし、ボールは幸いにしてあつちこつち行き来して、さつき忙しかった人がふつと一瞬暇になる。そのときに息を抜くのではなく、仲間に対する声、考えを出す。次はどこでおもしろいことがあるか、どこが危ないのか、と考えて、答えを見つけたらすぐ行動に移す。これを九〇分続ける。それをやつたら必ず疲れる。やらないよりはるかに疲れる。しかし、はるかに勝率は上がる。日本のサッカーの命題はコンセントレーションだ」。

これにはガツンとやられましたよ。

韓国の選手もこの前の試合で、一生懸命やつていました。東京でやられた敵をソウルで取り返そうと、必死でした。ただ、状況判断がちよつと甘かった。日本の選手のほうが、その点がちよつと優れているなと思ひながら私は見ていました。日本の選手は、若手ではあつても普段Jリーグで揉まれています。韓国はほとんどが大学生で、まだ大学のリーグのレベルだなど思いました。いわゆるコリアンリーグ(Kリーグ)というのがプロですから、そこにいる連中はやつぱりコンセントレーションを追求していると思います。だから、代表同士の試合になると、そういう意味では遜色ないですよ。お互いに、ふつと気を抜いた瞬間に点を取られています。それがこの前の試合のレベルでは、まだ

そこまで来てないな、と感じました。そのレベルを上げていかないと、仮にアジアで勝ち抜いても、本番でヨーロッパ勢や南米勢に出会ったらやられますよ。それはもうプロの卵みたいな選手がブラーツとでていきますからね。ヨーロッパでもどこでも、それができないやつは飯が食えない、という世界ですから。

だから、さつきお話しました中田はその中で傑出していきますよ。イタリーですら傑出している。彼はしょっちゅう首を振って見ているでしょ。眺めているのではなくて、見て自分の考えをまとめようとしている。次にボールが来たらどこに出したらおもしろいか、というのを考えています。「キラーパス」といいますが、キラーパスでも何でもありません。ちゃんと見抜いた上で、正確に蹴れたら、それが本当のキラーパスになるわけです。彼が決定的なアシストをやるときは、集中して、状況の把握ができていて、しかも正確にそこへ蹴れる技術があつて、それが一つになったときに実現している。

そういう意味では、サッカーの世界で集中力ナンバーワンと問われたら、世界中のジャーナリストが同じ答えをします。過去の中でだれが一番すごかったと言えば、全員が「ペレ」と答えるでしょう。南米はもちろん、ヨーロッパのジャーナリストも含めて、全員がペレ選手と答えますよ。あの人は三六〇度見えていた、と言

われています。「それじゃ化け物じゃないか、後ろに目はないはずなのに」という人もいるでしょう。実はペレは手がすいているときに、首振っているのですよ。どこに敵がいて、どこに味方がいるのか。時々刻々変わりますから、さつき見たら後ろは味方だった、では駄目なのです。今、敵が接近していて、ボールが自分のところに来て、自分が取るよりも後ろにいる仲間へ渡したほうがいいと思つたら、パツと足を上げてボールを通しますよ。そこにいたのが味方じゃなくて敵だったら、落語ですよ。彼はそういうミスがほとんどなかった。というのは集中しているから。そして無類に正確な技術を持っているから、相手はたまりませんよ。あんなの相手にしたらどうにもならない。ものすごい反則をやつて壊すぐらいしか手はないですね。それは鬻ぎを買うし、退場になる。

ペレは世界が認めた「ミスター・コンセントレーション」でした。南米だけではなく世界中のジャーナリストに「二十世紀の生んだ世界最高のスポーツマンはだれ」と聞いたら、モハメッド・アリとかいろんな答えが出るでしょうが、八十五パーセントはペレを書く、と言つていますよね。それぐらい大きな存在で、しかもマラドーナにあつたようなスキヤンダルがありませんでした。ドラッグをやつたとか、審判を挑発したとか、そういうことが一切ありませんで

した。そういう意味では、本当に我々の世界で最高の選手と言われたら、私も喜んでペレという名を挙げたいと思います。その理由は、今申し上げたように、ちよつと神がかり的な技術のすごさじゃなくて、すごい集中力。これはどんな競技においても同じです。

ところで、集中力について、お話しをひとつ。実は本日が、ワールドカップ二〇〇二年のときの練習会場に場所を提供したいという候補地の締め切りでした。うちの組織委員会のほうへ既に七十カ所以上の申し込みがきています。日本も大したものだと思います。フランス大会のときは百三十五カ所申し込みがありました。これはただ名乗りをあげればいいというわけではありません。グラウンド、しかも完璧な芝生のピッチが二面必要です。それで照明がないといけない。さらにホテルから十五分程度で行けるところ。さらにグラウンドの一面は外部の人間を完璧にシャットアウトできないといけないと書いてある。マスメディアといえども立入禁止の練習がありますよね。その設備がないところ、要するにがらんどうで見通しがいいところはお断りしております。それをクリアできるのが七十カ所もあるというのは、我が国もすごいですよ。ありがたいです。

この間、愛媛県の新居浜に行ってきました。

私の甥っ子がおりまして、そこに完璧なグラウンドを二面作り、そこを練習場にしたという話がありました。ただ、選ぶのは我々じゃない。日本に来るチームが選ぶので、協会などは一切介入できない。調査員が来て、それぞれが決定します。自分のグループがどこのグループに入るか、札幌組に入るか関東近辺組に入るのか関西なのか九州なのか、によってキャンプ地が決まってくると思います。それが七十カ所も出たらうれしいです。まだあと二十カ所やそこら出そうだという話です。

では、何故そんなシャットアウトにするのか、といえば、別に秘密練習をやりたいからではありません。確かに、みんなよく秘密練習をやりません。コーナークックやフリーキックは。パターン練習ですから。この角度に上がって来るボールに対しては誰が詰める、オトリは誰だ、最後に決めるのはアイツだ、というようにいろいろな決め事をして練習をします。これはどのチームもやります。決め事ができるのはそういう静止した状況からのフリーキック、コーナークックですから。あとは決め事しても試合の流れの中では約束なんか守れないですからね。その練習のときに相手のチームの技術屋が来たらまずいのです。映画の「007」のように報道に紛れて探りに来ますからね。だから禁止するのだ、とっておりますがそれは表面上の理

由です。

本当はカメラマンが五十人も来て、記者が百人も来たら、選手の気が散るわけです。気が散った状況の中で練習をしても何の効果もないし、むしろマイナスが出てくる。今のトルシエ監督は厳しいほうですから、「あいつは毎日、取材禁止して喜んでい」と日本のメディアはいいますが、そうではない。気が散らないようにして練習をやらせたい、それだけだと私は説明するのですが、それにしてもトルシエ監督は厳しすぎると評判が悪いようです。しかし、私にはよく分かります。それぐらい集中してやらないと駄目なのです。

野球でいえば、パ・リーグは既に優勝が決まったし、セ・リーグが決まるのは確か今夜ですね。終盤に来てからの、優勝がかかっているチームを見てください。選手一人ひとりの目の色が違いますよ。もちろん大きな目標が目の前にあって、たるんでいるようなやつはいないわけですが、目標を失ったチームとの戦いを見れば一目で分かるでしょう。結果はどうあれ、やっぱり集中していますよ。ベンチにいるやつが、らんらんとした目で試合を見ているでしょう。じゃあ、何故シーズンの始めからそれができないの、という素朴な疑問があります。周りの状況の中からああいうなにかが生まれ出されていくのだと思います。今、間違いない、中日ド

ラゴンズの選手が一番いい顔をして戦っていますよ。それは取りも直さず、優勝に近づいているからです。一昨夜の試合がもう運命決めましたね。私はそう思います。山崎のホームランで、優勝決まったな、と誰しも思ったでしょう。あれは、技術が打たせたのでもなければ、気力が打たせたのでもない。集中力が打たせたのだと私は思います。集中力、これが第二のポイントです。

第三のポイントは、チームのスポーツでも、仕事でも、家庭生活にも当てはまると思いますが、「仲間に対する思いやり」ということです。これも過去の選手で一番参考になる模範生、教科書、どんな言葉を使ってもいいですが、それはやっぱりペレですよ。いろんな名手がいっぱいいましたが、あの人は自分の都合よりも、仲間のために何が一番いいかということを考えてうえて仕事をする男でした。自分の都合はほとんど克服できるからこういうことができるのですけれどね。ほかの人のことを考えていれば足元のボールがどこかに取られてしまうというような技術のない人は絶対駄目ですよ。

中田もそれに近づいています。来たボールを処理する、どこに出そうか、もう決めている、どこかへ出すのだけれども、スライスするボールがいいのか、真っ直ぐがいいのか、速いやつがいいのか、ちよつとカーブがかかったほうが

次の仕事やしやすいのか。これはサッカーというスポーツをちよつと経験された方なら分かるでしょう。追いかけていったらどんどん逃げるようなボールでは往生しますよ。そうかといって足元に強烈な速いやつが来ても、これも困ってしまいます。それにはほどの強さ、速さ、球質、そういうものが要です。ペレはそれを実現しようと最高に努力した男でした。人間ですからミスもいっぱいありますよ。しかし、ここではこのボールと決めたら、それを実現しようとしたのです。だから、ブラジルのサムライどもがペレにはついていきました。

私がこれまで見た世界のいろいろな大会、試合の中で最高のゲームだったのは一九七〇年、メキシコで行われたワールドカップです。もう三十年近く前になります。一九六八年に我々はメキシコのオリンピックに行き、三位に入りメダルをもらったので、当時のサッカー協会が勉強のためにワールドカップを見てこいと送り出してくれました。これには感激しました。行って驚いたのは、メキシコの協会の人が「おまえ二年前に来たな」と憶えていてくれて、「あのときはお世話になりました」とお礼を言ったら、「実はね、あのオリンピックはこの大会をやるためのリハーサルだったんだよ」と言っておりました。あの辺の国はオリンピックをワールドカップのリハーサルに考えているの

です。「この大会を見てくれ。世界一の大会になるよ。なぜってブラジルが至上最強のチームをつくってきた」。もちろん、みんなそれは知っていました。

ブラジルはどんどん勝ち進んで、決勝戦の相手はイタリアでした。イタリアといえばヨーロッパで最高にディフェンスのうまい強いチームです。守りが鉄壁でね。「カテナチオ」という戦術が有名です。カテナチオというのは、万力のようにキューツと絞り込んで最後はバチツと潰してしまうディフェンスです。それを相手に、ブラジルは四点取りましたよ。一点は取られたけれど、もう完勝。「四点目でイタリアサッカーの息の根は完全に止まった」と新聞に書いてありました。今日までを含めて、まさに私の見た史上最強チームでした。その中心にペレがいました。

その試合の四点目というのは今でも忘れません。鮮明に覚えている。ペレがボールを持って、ディフェンスを二人ぐらい置いて、グワツと左にドリブルしていった。三人目が出てきて、これはもう潰されると思った瞬間に右足のアウトサイドから真横にピュツとボールを流しました。ちょうどサッカーというペナルティエリアのラインのあたりですよ。後ろから仲間が上がつてきているのが彼には見えている。バツクミラーを持っているのですね、彼は。普通

の人間の肉眼では斜め後ろから上がってきているやつなんか見えませんよ。さつき申し上げたように、ペレは瞬間的に感じている。それで仲間のところへピュツとパスを出した。だから、おれのところへついてこい、ついてこい、というふうにごう前の敵を全部どかして、大掃除したんですよ。そして、最後の瞬間にパツと流した。無人のグラウンドをボールが転がって

いて、一番後ろにいたフルバックの選手が出てきていた。目の前にボールがあつて、ゴールキーパー一人しかいない。ゴールは幅七メートル三十二センチありますから、サッカーやっついてこんな幸せな瞬間はない。目つぶって蹴つても入るし、日本の高校生でも入りますよ。外すほうが難しい。これをまたフルバックの野郎がしこたま力一杯蹴つた。彼はブラジルチームのキャプテンでした。ネットが破れるようなシュートでしたよ。これでイタリアはガタツときた。まあ、タイムアップ近かったですけどね。あれは、これまで見た一番凄いゴールでした。演出から脚本まで九十五パーセントぐらいまでペレがつくつて、総仕上げの部分だけキャプテンにやらせました。あれを見て、スポーツというのは凄いな、サッカーというのは凄いな、と思いました。ペレの心根が私にも伝わってきました。その試合が終わったあと、感動したんですね、しばらく動けなかった、席を立て

なかった。

それで随分時間がたって、最後の四點目を決めた男が日本にきました。サッカーの指導者を集めた講習会を読売ランドでやってくれました。協会から私が出向き、午前の部が終わって、一緒に昼飯をとりました。ポルトガル語の通訳さんがいてくれて、いろんな話ができた。

そのときに私は言いました。「あなたが取った四點目のことは一生忘れない。本当にビューティフル・ゴールだった」。彼は「ありがとう」と言いました。「あのときペレから出たボールはすごかったですね。敵を全部自分が引き受けて、邪魔者がいなくなるところであたのところに出しましたね」ときいたら、「そのとおり。でも、ペレはあのときだけじゃない。いつでもどんな試合でも、周りの仲間に対して最善を尽くすというのがペレの一番いいところだ、そうは思わないか」と言うから、私は「思う、そのとおりだ。でも、あなた方がペレに出すパスも特別だと思う。ほかのパスよりも気を使っている、心がこもっているように私には思える」と言ったら、「それは当たり前だ。ペレはいつもあれだけ、おれたちのために心を砕いてくれる男なんだ。その彼にチャランポランなボールを蹴ったとしたら、その男はもうスポーツマンじゃない、人間も失格だよ。自分もベストでこたえようと思わなければ人間じゃありませんよ」と、すごい調子で話してくれました。

サッカーというスポーツにとって何が一番大事なのかを、完全にこの男はつかんでいると思ったし、だから世界一のチームのキャプテンだったのだな、と思いました。非常にレベルの高い連中の心が、そこまで一つになっちゃったら勝てませんよ。生半可なやつが歯向かってみても勝てない。

でも、技術が低くても心がそこまでいっただらそれでスポーツは完結です。別に世界に出てどうの、アジアでどうの、という話ではない。普段、日常的にレベルの低いチームでも心がそのレベルまでやれたとしたら、これは最高のスポーツマンだし、その人はスポーツをやったことによつて、多分あとの人生にプラスが残ってもマイナスは残らないと思います。やっぱり全力を尽くしてくれる人間に対して周りは放っておかないよ。これはどんな世の中でも同じです。それが全部裏切られるようでは人生暗いですよね。世の中そうはなっていないですよ、間違ひなく。

だから、話が少しスポーツからはなれますが、自動車を運転しているときに、たまたま無理な割り込みのようになってしまふケースがあったとします。「しまった、これは右折専用車線だった、本当は真っ直ぐ行きたいのに」という場合があります。そういうときにカチカチ、ウ

インカーを点灯させてもなかなか車線に入ってくれないときがあります。関西なんか全然入ってくれません。東京はまだ割り込ませてくれるからいいですよ。特にタクシーは、私の経験ではカチカチ上げたら必ず入れてくれます。そういうことがあつたら、その次にそういう場面に出会ったとき無条件で入れますよね。自分がお世話になっておいて、人の世話はしないというのは人間のクズだと思えますよ。どうぞどうぞ、とは言わないけれども、仕方がないな、入りなさいよ、という感じになる。入ったほうは、このごろは感謝の意味らしいけれどチカチカと点滅させますね。

やはり人間社会、あるいは企業の中、みんな同じだと思います。ハートの部分というのがすごく大事。それをスポーツで体感しますよ。その頂点にペレがいたということです。フランス・ベッケンバウワーというドイツの選手もすごかった。それからイングランドの、今は敬称の「サー」がついた、サー・ボビー・チャールトンも反則の少ない、仲間に対して最善を尽くす選手だった。そういう人は今もって名前が残っています。デイエゴ・馬拉ドーナも天才だったけれど、残念ながらそういう形で名前が残っていない。南米でもそうだし、ヨーロッパ行ったら特にそうです。「ペレ？ ペレはすごい」「デイエゴ？ デイエゴはコレだ（※こぶしの

親指を下に向けたサイン」。それが評価です。その裏側にはドラッグの問題もあるのですが、やはり普段のプレイを見てみんなが知っているわけです。どれだけ仲間を砕いたか、心のこもった仕事ができたか。それが名人であればあるほど光を放ちます。

そういう目で見てみると、イタリアのリーグ、ドイツのリーグ、あるいはブラジルのリーグ。この間、パラグアイのコパ・アメリカに行ってきたけど、フランスで駄目だったブラジルが完全に生き返っていました。一人ひとりが仲間のためにプレイをするようになってきた。結果、ダントツの優勝でした。ブラジルはよみがえった。世界ランクでは圧倒的に一位ですから、やはりそれだけのものを持っています。幼いころからハングリーな中で、何とか上に上がりたい、という中から選ばれた連中というバックグラウンドもあります。今度はチームに入ってから競争で仲間のためにベストを尽くせないやつはふるいにかけてしまうのです。最後に残っているのが、もちろん体力もスピードも技術も並外れた能力があるけれども、それにもまして心の熱いヤツが残っていたので、ああいうチームになったのではないのでしょうか。その中で文句が言えないような存在がいたら、みんな頭が上がりませんよね。生きた教科書が目の前にあったらどうだろうか、そういうふう

な選手づくりが監督、コーチの義務でもあり任務でもあるわけですからね。

それには、スポーツだけではなくて、最初から申し上げているように、常に「何のためにやるのか」ということをしっかりと把握することが必要です。そして、事に臨んだら短時間でいいから集中しろ、ということ。一日中集中しろといったら人間死んでしまいます。夜は夜で本当に深い睡眠をとる。リラックスタイムがきたらサッカーのことなんか忘れる。自分が一番楽しいこと、好きなこと、それに没頭すればそれでいい。それでストレスから解放されるのから言うことはない。そのかわり、いったんピッチに立つたら、サッカー以外のことを考えるな言葉で言えばそういうことになる。それをかなりハイレベルで追求できた人が生き残っているといます。そして最後にゆとりができたなら、そのゆとりを自分のために浪費するな。仲間のために使ってくれ。これができるようになってきたら、それだけで一流選手です。技量は何であれ、スポーツ界で一流選手ですよ。それを我々は追求しなきゃいけないし、トルシエもそれを追求している。

あの人はどうもメディアとのつき合い方があまり上手でなくて、敵に回している節がありますね。スポーツ新聞あたりは特にそうかもしれません。スポーツ新聞は「トルシエ激昂」と

いうふうに見える見出しをつければたくさん売れるわけです。例えば「トルシエ解任」。びっくりして読んだら、「か？」なんて小さな字で書いてあるでしょう。駅の売店で見ると「か？」が見えないところに書いてあります。マスコミも「売らんかな」でやっておりますので仕方ありませんが、彼はそういうことに辟易していて、愛想が悪いわけです。いわゆるクオリティペーパー、日本でいえば、全国紙、これはきちんと対応しています。『タイムズ』誌なども同様です。

日本のスポーツ新聞の形態は、世界にまったく例がなく、ああいうのは見たことないですね。内容も何でもありで、もちろんスポーツ紙と名乗っているから、プロ野球、相撲、ラグビーがあつて、競輪、競馬があつて、エロがあつて、わけのわからないスキヤンダル記事があつて、最後にテレビの番組表があつて終わり。ああいう形態は世界で見たことないですよ。それだけでも特異な存在だと思います。けれどもそれも含めてマスメディアですから、監督は手を抜かないで対応しなければならぬのですが、ちよつと試合が悪いと「きょうは記者会見なし」と言つてトルシエ監督はパツと帰つてしまします。それで、評判があんまり良くないので、協会も監督に、義務は果たさないかと横から言っているのですが、「分かっています」と

そのときは殊勝ですけど、カッとなると忘れてしまうようです。

でも、間違いなく、彼はなかなかしつかりしています。私は買っています。約束どおり、チームをシドニーに持っていく。それがおまえさんの義務だよ、と。それを一生懸命追いかけている。それをつつがなくやる。さらにシドニーでベスト4に入るような頑張りを示させたら、彼は二〇〇二年のワールドカップまで続行するようになるでしょう。しかし、予選でこけたりすると危ないですよ。これは競技の世界、スポーツの世界はしやうがないです。信賞必罰という世界ですから。

話が脱線しました。もう約束の時間がきていますね。ロスタイムに入ったら悲劇が起きますから(笑)、レギュラータイトで終わりますよ。とりあえず何の役にも立ちませんが、サッカー界、スポーツ界、みんな同じことで、そういう意識をみんな持ってやっていますよ、というところをご理解いただければありがたいと思います。

「清聴、どうもありがとうございます。」

—質疑応答—

●質問者 これからの日本のサッカーのレベルを高めるにはどうしたらいいですか。

●長沼 これは難しい質問だから、この場で手

短に答えるのは大変ですね。ここまで若手が伸びてきたということは、まわりの国は認めてくれています。これは韓国や中国が、日本に何回も来て、どうやってあそこまで若手を伸ばしたのか、日本のシステムを教えるといってきたいますので、協会は一生懸命対応しております。日本も大事ですが、アジアのレベル自体をあげなければいけないのだから。世界から見たら、まだまだ低いですからね。

我々はまずトレーニングセンター・システムというのをつくりました。日本中に支部的な組織を置き、その中で強い子、うまい子、可能性のある子を発掘しなさい。発掘できたら、支部の中での選抜大会みたいなものをやってください。その中でまた芽を出した子は支部からまた一歩広げて、関西なら関西ブロック、中国なら中国ブロックとやってください。さらにそこで芽が出たら、セントラル・システムの中に取り込みましょう。鹿児島の子も青森の子もそこに来るわけですね。そこで紅白戦を何回もやって、「足りないところはこれ、これはこのまま伸ばしたらいい」というのを指導者と一緒になつてやるようになって、地方の無名チームの優秀な子が随分出てきたのですよ。柳沢君なんてそうですよ。富山だろうが、青森だろうが、島根だろうが、いい子はいいい子ですね。可能性がある子はチャンスを与えろ、と。

それと、川渕くんがやってくれたJリーグの百年構想ですが、私はあれが正しいと思ってるのは、一部リーグだけではなくて、サテライトと呼んでいます。二軍を持ち、さらにユースまで持て、と指導したことです。そして同じユニフォームを着せて試合をさせなさいというシステムをとった。そこに入った子はトップチームの試合や練習を見られるし、トップチームからときどき選手が来て面倒を見てくれました。それが刺激になって、幾つか花が咲きました。

ですから、Jリーグのシステムと、我々のセントラル・トレーニング・システムというものがドッキングした成果だと今は思っておりますが、これで満足したら駄目です。これをさらに補強していく。お金も幾らかかかりますが、教育にはお金がかかりますよね。それでアジアの底上げができれば、もうちよつとヨーロッパや南米と渡り合えるようになる。一日にして成りませんよね。やつとこの間、ナイジェリアで日本のユースが決勝まで行きました。あれにはびっくりしました。私がつくりしているようでは情けないのですが。あそこまでよく行つたなと思っております。

だから、若手を伸ばしていったら、今度のシドニー組の選手が中心になって二〇〇二年のワールドカップが大事だと思います。今、ちよつ

とJリーグのレベルが下がっているのが残念ですけどね。これをもう一回上げていってもらって、そこに若手を放り込んでいってやっていけば、また同じように、去年より今年、今年より来年というふうにならずにステップアップできると我々は信じています。

●質問 最後のほうで「信賞必罰」という言葉を言っておられましたけど、この場合はどういう意味でしょうか。

●長沼 競技の世界はみんなそうですが、いいプレイがあつたら、よくやったと誉め、バカみたいなミスをやつた場合、なんであんなことをやつたのだと叱る。中日ドラゴンズの星野仙一さんなんか典型ですね。くだらないフォアボールなんか出したら、そこらじゅうを蹴って怒っていますよね。あれね、ベンチに帰ったら怒られるんですよ。「バカヤロウ。何であんなところでフォアボール出さんだ」と。今度キャッチャーも呼ばれてね、「お前の要求したボールは何だあ」というわけです。それはスポーツの世界はしかたがない。そのかわり、怒ってばかりでは人間暗くなります。一方では「きようはこれが良かったぞ」と誉めることがあって、人為的なミスについては気をつけるよというのが罰なんです。昔は体罰がありました、あれは最悪です。何にもいいことはない。バカヤロ

ウ、ポカンとか、たるんどう、ポカン、とか。それでは相手に何も伝わりませんよ。「どこがたるんでいましたか」と聞き返したらもつといけない。また五回ぐらいたたかれますから。それはスポーツじゃない。暴力ですよ。そうではなくて、分かるように言つてやる。今、清水エスパルスは割に調子がいいですが、ペリマンという監督は選手に対する接し方がとつてもうまいですよ。あの人に言われたら、よし、次はやろう、という気になる。こういうのはいい指導者ですね。信賞というのはそういうことです。褒める。罰というのは拙いことをやってしまったときに気をつける、次の試合ではないようにしろ、そつちのほうの話です。それでいいですか。

●質問者 中田は周りを見ることができるとおっしゃっていましたが、周りを見て判断できるようなトレーニングがあるのでしょか。

●長沼 これは、クラマーさんからいつもいわれたお説教は、「ルック・アラウンド」です。そして「シンク・ビフォー」。日本の選手はそれができていない。周りが見えない。前もって考えることができない。だから、行き当たりばったり。全然選択ができていないわけですね。瞬間的に、Aに出せる、Bに出せる、その中でうちにとつて何が一番いいかって見てれば分

かるはずですよ。敵が薄いか、足が速い選手のところへスパッとボールが行つたらこれはおもしろい、とわかるわけです。それで本当に自分のところへ来たたら、企画どおりの仕事をすればいいんです。

それが正確であれば言うことはありませんが、周りが見えてないやつはボールをもらつてから、どこだつて、と見るんですよ。それでは遅い。優秀なディフェンスだったら、完全にドアを閉めて鍵をかけます。鍵かかってしまったところにボールを出しても、それから広がりが出ないでしょう。まだ鍵をかけるこねているところを発見して、そこに速く出すっていうのが大事です。それが周りを見ろということです。

中田はその習慣を身につけていますよね。あいつはいつも、伸び上がってキョロキョロしている。威張っているのではないんです。ちょっとでもそうしたほうが周りが見やすいわけですよ。それでパツと見て、頭の中に入れておくという習慣がないと、あのポジションはできません。名波も、あのポジションが長いから、ほかの選手よりはその能力がちよっぴり高いです。ただ、最後にそこに正確に出すというところですが、左足なら彼は八割ぐらい正確に出しますが、右足ではちよつと扱いかねるといふところがあつて、あれを克服しないとイタリアでレギュラー張つて飯を食うのはそう簡単では

ないだろうなという気がします。

●司会 それでは、以上をもちまして平成十一年度体育祭記念講演会を終了させていただきます。

長沼先生、どうもありがとうございました。  
(拍手)

※当DVD収録の講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。